特別寄稿

Joe誕生160年

～同志社の源流・上海～

元大学神学部教授　本井（もとい）　康博（やすひろ）

四十七年の分岐点

四十七年にわたる新島襄の生涯（永眠は四十六歳）は、内容的に三分割できる。

Ⅰ（一八四三～六四）の二十一年間。Ⅱ（一八六四～七四）の十年間。Ⅲ（一八七五～九〇）の十六年間である。各期で名前や身分、生活圏がまったく異なる。

Ⅰ期は、サムライの子として江戸で誕生してから函館からの密航までの期間で、名前は幼名の七五三太（しめた）が敬幹という諱（いみな）（成人名）に変わる。Ⅱ期は、一年余の移動期間（船上生活）を含めて、主として欧米時代。身分は留学生で、この間サムライから信徒へと変身。名前も当初はJoe（ジョー）、アメリカ上陸後はJoseph（ジョゼフ）と改称。Ⅲ期は、帰国から永眠までで、襄と名乗った。身分は牧師、宣教師で、同志社校長と同志社教会の牧師を兼務した。

分岐点はⅠ期とⅡ期を分ける一八六四年である。新島の生涯中、最大のスリリングな冒険の年であった。なかでも上海での出来事は彼の人生を前後半に分けるメルクマークとなった。

密航を助けた三人の船長

一八六四年、新島は三隻の船を乗り継いで密出国に及ぶ。品川から函館までは安中藩の兄弟藩、備中（びっちゅう）松山藩（現岡山県高梁（たかはし）市）所有の快風丸、ついで函館から上海までは長崎の貿易会社のベルリン号（船籍はプロイセン）、最後は上海からボストンに戻るハーディー商会のワイルド・ローヴァー号である。

快風丸の船長は不詳であるが、新島は加納格太郎と特定する（『新島襄全集』一〇、一六頁。以下、⑩一六）。同船が品川から高梁川河口の玉島港（現倉敷市）まで回送された際、新島は航海技術を買われて乗込んだ。

この時、懇意になったのが備中高梁藩士の加納である。その後、同船が品川から函館経由でサハリンへ行くことを新島に告げ、案に乗船を勧めたのも加納である（⑩三九～四〇）。加納はたとえ船長でなくとも航海上、重責を担っていたと思われる。編集委員会編『現代語で読む新島襄』（二九三頁、丸善、二〇〇〇年）に収録した略歴（本井稿）を転載する。

「加納格太郎（一八三四？～一九〇七）備中松山藩士。同藩で中小姓を務め、江戸詰めでは御供番句読師兼帯、銀

三枚二人扶持であった。快風丸で新島襄と玉島航海を共にした翌年、同船が箱館へ航海することを新島に教えた。

新島は帰国後、高梁に加納を訪ね、汁粉を振る舞われた。昔、箱館行きのおり、加納が送別のために新島を料理屋に誘ったところ、新島が『酒はいや。汁粉をくれ』と言ったことを加納は覚えており、『別れの時が汁粉なら、会う時も汁粉』となった。[後略]」。

参考までにアメリカ人船長ふたりの略歴（本井稿）も同書（二八五頁、二八二頁）から転載する。

「**セイヴォリー**　W.T.Savory（一八二七～一八九七）マサチューセッツ州セイラム出身の船長。ベルリン号で新島襄を箱館から上海まで運んだ。新島は船長の信仰を疑問視するが、セイヴォリー自身はセイラムの第一教会（会衆派ユニテリアン）の会員である。晩年はセイラムで実業に従事したが、健康を損ねたためにフロリダに転出し、デランドで死去した」。

「**テイラー**　H.S.Taylor（一八二九～一八六九）ワイルド・ローヴァー号の船長で、新島襄を上海からボストンまで乗せた。新島（Joe）の名づけ親。帰米の折は留学生の新島をチャタム（マサチューセッツ州コッド岬）の生家に招き、家族同様に持て成した。新島の留学中にボストン港で事故死した。それを知った新島は、彼の親戚に入信を勧める熱烈な手紙を書き送った」。

七五三太からJoeへ

三人の船長中、最も注目すべきはテイラーで、「私をまるで自分の兄弟のひとりのように扱ってくれた」と新島は感謝する（⑩四八）。年齢（十四歳上）や関りからも「アメリカの兄」であった。上海での初対面のおり、新島を日本名で呼べずJoeと呼び替えた（⑩四七）。なぜジョーか。

出身地のコッド岬ではよく知られた名前である。ただし「品のない愛称」とか。八重もまた「大変侮蔑の意味だった」と伝える（拙著『ビーコンヒルの小径～新島襄を語る（八）～』一一〇頁）。逆に聖書的な解釈説もある。ジョーは『旧約聖書』の「創世記」に登場するジョゼフ（ヨセフ）の愛称である。このヨセフの身上に新島を重ねて命名したのであれば、テイラーの予知能力は驚嘆すべきである。なぜか。

ヨセフは、兄弟によってエジプトに売られたが、さいわいにもパロ（古代エジプト王）の愛顧を受け、奴隷から宰相（首相）にまで昇りつめ、イスラエルの人々を大飢饉から救って感謝された。テイラーは、祖国を棄て異国に向かう日本人青年にどこかヨセフ的な生き方や心情を見抜いたの

①快風丸（同志社エンタープライズ提供）

②ベルリン号（同前）

であろうか。新島はアメリカではパロならぬA・ハーディーという土地の名望家の家庭に引き取られ、実子並みの処遇を受ける「大幸」（③四三）に恵まれた。

ハーディーはワイルド・ローヴァー号の船主で、ボストンで貿易会社を経営する資産家であった。部下のテイラーが上海から連れて来た新島を見込んで、「アメリカの父」となった。「私のアメリカの両親は、私をJosephと呼ぶことにした」という（⑩四七）。ボストンではジョーの名は砕けすぎて上品ではないとの判断もあったようである。

こうして新島は以後九年間ジョゼフを名乗るが、帰国後のことを考慮してジョゼフ（ヨセフ）の漢語訳「約瑟」から新島約瑟と自署し始める。しかし、ジョゼフと読んでもらえないため、横浜に戻るやジョゼフをジョーに戻して漢字変換し、最初は「譲」、ついで「襄」とした。

八重もまた、帰国後の襄は「翰夫」と書いて「ジョセフ」と読んでいたが、「あまりむつかしいので『襄』とした」と証言する（永澤嘉巳男編『新島八重子回想録』一〇二頁、同志社大学出版部、一九七三年）。

生涯の運命を決めた上海

こうして見ると、襄の誕生は遡れば一八六四年の上海である。一八四三年に神田で生まれた七五三太は、二十一歳でその生涯を閉じたも同然である。新島民治は安中藩庁に「息子は箱館沖で測量中に難破に遭遇して行方不明」と届出た。戸籍的には死者扱いであるが、現実的には息子は上海でジョーに再生していた。

七五三太とジョーでは、別人ほどの違いがある。名前や身分の点で上海が新島の生涯にとって分岐点になったからである。I期で身についた誇り高きサムライ意識は、函館を出る時も抜けなかった。ちょん髷をおろすことにも抵抗があった。真夜中にこっそり小舟でベルリン号まで運んでくれた福士卯之吉（成豊）の忠告にもかかわらず、丸腰になれずに二振りの佩刀を船に持ち込んだ（田中兎毛「福士成豊に約す」三二頁、『新島研究』五一、一九五四年一一月）。刀は二代目國助の作で、銘は「笹丸雪」と打たれた（河内國平「新島襄帯刀國助とその系図」七七頁、『同志社談叢』一九、一九九九年三月）。

ところが船が上海に近づく頃、新島に劇的な心的変化が生じる。髷を切り落とし一部（新島遺品庫に現存）を残して、北上する黒潮に船上から投げ込んだ。上海ではテイラー船長に船賃代わりに大刀を差し出す。続いて香港では、漢訳聖書購入のため小刀を船長に買ってもらった。

髷と佩刀（由緒ある名刀ならばなおのこと）を手放すこ

とは、「サムライの魂」と訣別する決死の行為である。後年、新島が板垣退助に対して「新心を得、新民とならるる」ようにと勧めた文言（③二五四）を新島に当てはめると、「新心」を得て「新民」へと転身する精神革命が東アジアで生じたのである。サムライから信徒への大転換である。

新島の教え子、波多野培根は「新島先生の生涯の運命」は「ワイルド・ローヴァー号に乗込まれたる時に決定した」と見る（『新島先生記念集』二五頁）。一方、函館在住の片山幽吉牧師は、新島の運命は「函館の地で確定した」と解する（同「新島先生の脱国と紀念会堂の建設」、『基督教世界』一九三六年四月二日）。

しかし、新島自身は上海での乗船を「大幸の基」と断定するので（③四三）、上海の方が妥当であろう。

ハーディー家での養育

新島はアメリカ上陸後に「大幸」に恵まれ、三つの学校で学び、信徒、牧師、宣教師へと進化する。すべては「アメリカの父」のおかげである。

ハーディーはボストン有数の篤信の信徒（会衆派）で、由緒あるオールド・サウス教会（会衆派）で会計を務めた有力な教会員であった。マサチューセッツ州の名門校（いずれも会衆派系）であるフィリップス・アカデミー（ハイスクール。ハーディーの母校）、アーモスト・カレッジ（大学）、アンドーヴァー神学校（大学院）の理事を務めていた。

さらにアメリカ最古のミッション、アメリカン・ボード（会衆派）の理事長格でもあった。

新島はハーディーによって送られた先の三校で濃密なキリスト教主義教育を享受して信徒、牧師となり、最後はアメリカン・ボードの宣教師にも取り立てられた。Ⅱ期で獲得したこれらの資質や資格は、そのまま日本に持ち込まれてⅢ期で花開く。

すなわちⅡ期とⅢ期は緊密に繋がる。名前や資質、身分の点でも共通性が見られる。これに対してⅠ期とⅡ期のステージはあきらかに相互に異質で、断絶する。両時期の人間性には別人かと思われるほどの大きな格差があるのに対して、留学中の新島と帰国後の新島は、諸種の点で首尾一貫し連続する。新島の人生上、上海を分岐点と捉える所以である。

三段跳びに準らえると、品川からホップした新島は函館でステップし、上海で高くジャンプした結果、ボストンに無事に着地できたというわけである。

かくしてボストンの家庭、学校、教会、社会で培われた新島の会衆派的素養は、そっくり同志社に持ち込まれる。たとえば新島の抱く教育理念・方針の基底をなす会衆主義は、そのまま同志社の基盤に据えられた。

すなわち、新島の思想と

③ワイルド・ローヴァー号（同前）

行動の基軸だけでなく同志社の骨格が形成される出発点も上海であった。端的に言えば、同志社の源流は上海である。

上海は新島個人の運命を決定したうえ、同志社の運命（骨格）をも確定した。上海での新島とテイラーの邂逅が、後にボストンにおいて新島を「ハーディー・ワールド」へと導く。つまりは同志社の開校は、新島が上海でジャンプしたその延長線上に浮かび上がってくる出来事である。

その点を意識して私は、二〇〇四年に室町校地に寒梅館が竣工したとき、ハーディーとテイラーの功績を末永く記念するため、館内の大ホールを「ハーディーホール」、小ホールを「テイラーホール」と命名する提案をした。前者は実現したが、後者は落選し「クローバーホール」になった。私的には「アメリカの父」と共に「アメリカの兄」の名を合わせて寒梅館に刻みたかった。

四人目の船長　A・バートレット

ところで、テイラー船長はボストンに帰港するや船主のハーディーに、養父となって教育を授けてほしいとの新島の要請を取り次いだ。しかし、それ以上のことはテイラーの力量を超えた。別の助っ人が必要であった。

そこへ登場するのが四人目の船長、A・バートレットである。彼に関する従来の情報は、ミッション機関誌に掲載された一文、「その頃［ボストンに到着した］この日本青年［Joe］とよく会っていた」だけであった（拙著『新島襄と建学精神』三七頁。［　］は本井、以下同）。その後のボストン現地調査で、無事にアメリカに着地した新島が、合法的なアメリカ入国という密航の総仕上げを成し遂げるには、バートレットの援助が不可欠であることが判明した。

④A・バートレット元船長

ハーディーが新島から渡米理由を聞き出すには言葉の壁が厚すぎた。そこでハーディーは自分が理事長を務めるボストン船員ホームに彼を泊め、専属チャプレン（宗教主事）に新島の指導を依頼した。新島が二泊三日をかけた周知の「脱国理由書」にハーディー夫妻が合格点を与えたので、新島は同家に養子同然の身で入ることが許された。

八年間に及ぶアメリカでの恵まれた留学生活（大幸！）を保障してくれたこの英文文書（原文は⑦三～二八）は、当時の新島にしては長文で、しかも宗教的にも見事な出来映えであったので、従来から単独執筆とは言い難いと疑問視されてきた。無理もない。現実にはインストラクターがいたのである。バートレットである。新島は彼の指導を受けて英文祈祷文（写真⑤）も作成している。

祈祷文の原物（メモ）は現在、学内の新島遺品庫にある。日付は船員ホームに入所した翌日（一八六四年十月十二日）である。メモは長くバートレットが所持していたが、後に同志社に寄贈されたことからも新島との師弟関係が窺える。

ちなみにメモの英文署名（Joseph Nei-Sima）も特筆すべきである。ジョゼフを名乗った初例だからである（拙著『ビーコンヒルの小径』、一四三頁）。あるいは、ジョゼフへの改称はバートレットの発案か。

彼は神学教育を受けた正規の伝道師や牧師ではなく平信徒で、元々は船長であった。人柄や信仰、指導力を見込まれてボストン船員ホームのチャプレンに抜擢されて陸に上がり、施設を利用する船員たちの宗教的指導を任された。彼をホームに招いた人物こそ、ハーディー理事長であった（同前、一二五頁以下）。

理事長の期待に応えてバートレットは、新島が脱国理由書を作成するのに必要な英作文ばかりか、内容を信仰的にブラッシュアップするのにも適切な指導をした。

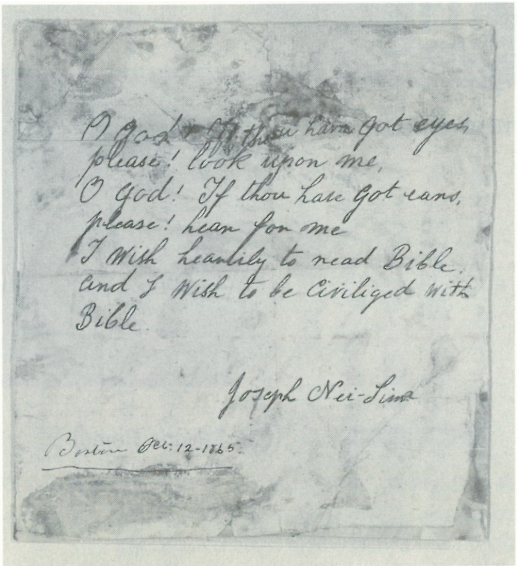
ちなみに彼は各船舶に洋上図書室を設けることにも熱心であったので、当然ワイルド・ローヴァー号にも宗教的な書物を備えた部屋かコーナーがあったはずである。新島は当時の「航海日記」に「甲比丹〔キャプテン〕、予ニバイブルを与へり」と記すが（⑤四六）、バイブルが船内備えつけのものであれば、これ又バートレット効果である。

Joseph のアメリカ・デビュー

バートレットの扶助によって入国できた新島を紹介した新聞記事が二件（AとB）ある。フリーライターの八木谷涼子氏提供の新資料で、私訳で紹介したい。

記事にはバートレットへの言及があるので、ニュースソースは彼か。祈祷文ばかりか、異邦人（異教徒）の回心例として新島が格好の証人であることをバートレットは地元市民に伝道上ぜひとも伝えたかったに相違ない。

なお、新島の祈祷文原文も記事に収録されているが、新島は脱国理由書でもこれを引用している（⑩二〇）。



⑤新島襄の最初の祈祷文（拙著『ビーコンヒルの小径』142頁）

A　『クリスチャン・ミラー』（一八六五年十一月七日、ポートランド、メイン州）

「ボストン通信（ボストン、一八六五年十一月二日）

日本の青年、ジョゼフ・ニイシマ（Joseph Nei Sima）は、

⑥W・T・セイヴォリー船長

かつて祖国ではある地方［上州安中］の支配者（princes）のひとり［安中藩主の板倉勝明（かつあきら）］の家臣であったが、最近、当市にやってきた。

異教徒でありながら真の神に関する知識を熱望する実例として、彼の履歴は興味深い。神主（Kanusi）、すなわち聖職者が説いてきた日本古来の宗教である神道に、子どものころから慣れ親しんでいたが、太陽や諸々の自然物を崇拝することに彼の心は満足しなかった。

彼は太陽を創られたのは人格的な神であると思ったので、キリスト教の真理を知りたいと望むようになった。父親も支配者［藩主］も彼が家を出ること［脱藩］を禁止したが、彼を止められるものは何もなかった。

彼は密かに身を隠して［函館から密航し］、種々の体験を経てついにボストンに達した。ここでは善良なバートレット船長（Capt. Bartlett）を知己とした。

あるボストン商人［A・ハーディー］が、彼の教育に当たろうとしているが、この商人は市内の全教会で称賛されている［著名な信徒である］。ニイシマは、［アンドーヴァーの］フィリップス・アカデミーに入ることになっていると先週、私（T.P.E.）に語った。祈ったことはあるのか、と聞いてみたら、あると答えた。何を祈ったのかと聞くと、彼は鉛筆で次のように記した。

『あぁ神よ、あなた［Thou］が耳をお持ちであれば、どうか私に耳を傾けてください！私は心から聖書を読んでみたいのです。　ジョゼフ・ニイシマ』。

キリスト教の真理を求めたいという彼の熱意は人を感動させ、一般の人たちの無関心とは対照的である。他の多くの者たちは、福音の恩恵にあずかることに全生涯をかけると口では強調するものの、恩恵については何の関心も示そうとはしていない。［後略］」。

B　『ニューヨーク・オブザーバー&クロニカル』（一八六五年十一月九日、ニューヨーク市、ニューヨーク州）

「日本人の祈り

ボストン市パーク通り教会［Park Street Church］の週間祈祷会において、最近、船員宣教師（sailor missionary）のバートレット船長（Captain Bartlett）が、傍に座らせたある日本人青年のことを話題にした。

青年は［江戸から函館を経て］中国［上海］に行き、［香港で自分が］読める［中国語訳］聖書を見つけた。そして真の神と永遠の生命についてもっと学ぶために逃亡し、この国に来るためにあれこれと骨折って活路を切り開いた。

［ハーディー商会のオーナーである］アルフィーアス・ハーディー卿（Alpheus Hardy, Esq.）が所有する船の一つ［the Wild Rover］に［上海で］乗りこみ、青年は［ボストンに］来た。ハーディーは、好意的に彼の教育を引受けた。青年は、自分が有為の人間になるのに相応（ふさわ）しい努力

を重ねることを約束した。彼の決意は次の祈りからも明白である。この祈りは、彼が手ずから上手な字［英語］ではっきりと書き下ろしたものである。

『あぁ神よ！あなた［thou］が目をお持ちであれば、どうか私に注目してください。あなたが耳をお持ちであれば、どうか私の声に耳を傾けてください。私は心から聖書を読んでみたいのです。聖書で教化していただきたいのです。ジョゼフ・ニイシマ』。

これぞ『神を慕う感覚』ではないか。この青年こそ、［『マタイによる福音書』八章十一節にある］東洋と西洋からやってきた人ではないだろうか。J.W.C.」。

⑦H・S・テイラー船長夫妻と新島襄（テイラー家アルバム）

Joe から襄に至る道

以上の報道は新島の留学開始を告げるプロローグとなった。一方、エピローグを飾る報道はよく知られている。日本に帰国する直前のラットランド集会に関する記事（『ラットランド・ウィークリー・ヘラルド』一八七四年一〇月十四日）である。半世紀前、『同志社百年史』通史編Ⅰの冒頭でスクープとして公表（日本語訳）されたので、今では新島伝中、周知の集会である。

ところで、ラットランドの報道では新島の名前は Joseph Neesima とある。しかし、報道前日（十月十三日）に認めた手紙では Joseph H. Nee-Sima と自署し、ミドルネーム（Hardy）を挿入したと付記する（⑥一四四）。名実ともに「ハーディー夫妻の子」となったわけである。

こうして七五三太として出国した新島は、Joseph Hardy Neesima となって帰国する。実際、彼にとってハーディー夫妻は「実の両親以上」の存在であった。「私はお二人様の愛によって誕生した者」と自認する（⑩三一八）。

一方、日本語名が新島襄と確定するのは、Joe 誕生十年を経た一八七四年の横浜においてである。手紙の署名では「襄」に「ジョフ」とルビを振ったうえ「ジョフセフの略也」と注記する（③一二五）。

ともあれ新島の個人名は、Joe に始まり襄に落ち着くまで種々の変遷が見られたが、日英両語とも系譜的にはアメリカの兄と父に由来するテイラー・ハーディー・ラインに一貫して沿う。その点、Joe が生まれた上海はその出発点であるばかりか、その後の飛躍が約束された飛躍の地にもなった。ボストンではハーディー夫妻の子となる「大幸」が Joe の到着を待ち受けていた。